

蜀漢南征故事考

——三國故事遺跡二探——

序

明清代、大量に編まれた地方志には、三國の故事にまつわる遺跡が多く載っており、その中には稀に、ごく断片的ながら、他の現存資料に類例の見當たらない故事が存在する。従って、地方志の記載もまた、三國故事の變轉絶え間ない諸相の一端であると考えられよう。

例えば乾隆『四川通志』「劉封井」の項には、劉備が養子の劉封を鼓に押し込め、山上から轉がし落として殺したという傳承を載せる。明の『花關索傳』にも同様の故事が見えるが、京劇『滾鼓山』など現代の傳統劇目では、劉封を殺すのは張飛の役割である。これは『演義』の『鞭打督郵』⁽³⁾において、督郵を毆打する役回りが、史實の劉備から張飛へ移ったのと同

類の變容であり、『四川通志』の記述は、その過渡期の一例といえよう。

各地方志の記述が、その時代と地域における三國故事の相を、ある程度において反映しているとすれば、逆にそれらの記述から、他の文獻に見られない三國故事の様相や、その成り立ちを類推することは可能であろうか。

三國故事の一つの總括である『三國志平話』および『演義』において、諸葛亮の南征故事は、呪術合戦や女將の登場など、他の部分とは些か風格を異にして、むしろ清代通俗戦記に近い趣を持つ。

そこで本稿では、南征の舞臺となった四川省西南部および雲南・貴州兩省の地方志において、南征故事に關連する遺跡を抽出・検討することで、その特異性にまつわる手掛かりを

土 屋 文 子

探ってみたい。

一 南征故事と諸葛亮傳承

史書の記述によれば、蜀漢建興元（二三三）年夏、益州郡の大姓雍闓が太守を殺して叛亂、牂牁太守朱褒・越嶲の夷王高定らもこれに呼應した。これに對し三年三月、諸葛亮は自ら軍を率いて南征し、まず越嶲を平定、さらに瀘水を渡って滇池に至り、十二月、成都に歸還した。諸葛亮の本隊のほか、馬忠の別隊が牂牁、李恢が益州に各々進軍、さらに最奥部の永昌郡では、呂凱が叛軍の包圍を拒守し抜いた。⁴ 諸葛亮は、越嶲の後を繼いだ孟獲を「七縱七禽」し、夷人を心服せしめたという。⁵

こうした史書の記載を素材とし、孟獲の《七擒七縱》を中心に、諸葛亮を主役として創作・再構成されたのが、『平話』『演義』の南征故事である。

【a. 『平話』南征故事概要】

雲南郡太守雄闓・不危城太守呂凱・雲門關太守杜旗の江南三鎮が、九溪十八洞の蠻王孟獲と結んで叛亂。諸葛亮は五萬の軍を率いて南征、雄闓を斬り、呂凱と杜旗を捕らえる。

瀘水を渡る。孟獲を捕らえ、財寶と引き換えに釋放⁽¹⁾。哭娘廟(?)へ焼香に訪れた孟獲を、伏兵を以て捕らえる⁽²⁾。病に倒れた孟獲を、治療を口實に陣中に召喚⁽³⁾。

孟獲が高みから毒を撒かせる。諸葛亮は風を祭って對抗⁽⁴⁾。諸葛亮の一喝で孟獲は落馬、捕らえられる⁽⁵⁾。

孟獲は虎や豹をけしかける。「蠻牌」でこれを撃退⁽⁶⁾。「風輪」に乗って焦紅江を渡る。孟獲は「諸葛は天神だ」と嘆じ、服従を誓う⁽⁷⁾。

「五年以内に、岐山へ助けにくるよう」と孟獲に指示。

【b. 『演義』南征故事概要】

蠻王孟獲が十萬の軍を興して叛亂、建寧太守雍闓らもこれに呼應。諸葛亮は五十萬の軍を率いて南征し、雍闓らを討って三郡を平定。

呂凱の案内で進軍、三洞の元帥と孟獲を捕らえる⁽¹⁾。

瀘水を渡る。三洞元帥が孟獲を捕らえて差し出す⁽²⁾。

孟獲が弟の孟優を内應に送り込んだのを一網打盡に⁽³⁾。

西洱河を渡る。孟獲と對陣、陷穽に誘い込んで捕らえる⁽⁴⁾。

蜀軍が毒泉に苦しむ。馬援廟に祈り神助を得る⁽⁵⁾。

木鹿大王の猛獸軍を、用意の木製巨獸で打ち破る。⁽⁶⁾

兀突骨の藤甲軍を盤蛇谷で燒殺、孟獲を心服せしめる(⑦)。
 歸途、瀘水の神に饅頭を供えて祀る。

(嘉靖本18—3—19—1、毛本第87—91回)

このうち、『平話』と『演義』に共通の要素としては、以下のものがある。

(1) 渡河の困難。南方は古くから瘴癘の地とされ、ことに瀘水は春に瘴氣を發するため、三、四月の渡河は不可能とされた。『平話』においても、蘆水江すなわち瀘水の熱と煙瘴(a①)、焦紅江の川幅と水深(a⑦)が、障礙として設定される。『演義』では、瀘水の毒氣(b②)に加え、西洱河では弱水のごとき浮力の弱さが設定される(b④)。

(2) 猛獸使い。『平話』では孟獲が虎豹をけしかけ(a⑥)、『演義』では加勢の木鹿大王が呪術で「虎豹豺狼、毒蛇猛獸」を操る(b⑥)。これに對し諸葛亮は、『平話』では「蠻牌」なる盾、『演義』では木製巨獸で猛獸を壓倒する。

(3) 祭風。『平話』では孟獲の撒いた毒に對して、諸葛亮が「持劔祭風」し、毒を敵陣に流す(a④)。『演義』では猛獸と呪術攻撃に對し、羽扇で風をおおぎ返す(b⑥)。

次に、『平話』のみに見られる要素は、以下の通りである。

(4) 毒。毒物の人爲的な使用が見られるのは(a④)のみ。
 (5) 大喝。諸葛亮は大音聲で孟獲を落馬させる(a⑤)。
 (6) 彈琴。蘆水江では琴を弾いて水温を下げ(a①)、焦紅江では雪を降らせる(a⑦)。

(7) 風輪。焦紅江ではこの飛行機械を用いて渡河(a⑦)。
 『演義』のみに見られる要素は、以下のごとくである。

(8) 毒泉・煙瘴。啞泉など四つの毒泉と煙瘴が、蜀軍の進行を阻害する。諸葛亮は馬援廟に拜して解毒の法を得、天に祈って水を得た(b⑤)。

(9) 祝融夫人。孟獲の妻で祝融氏の末裔、(b⑥)に登場し、蜀軍の武將を次々に生け捕る。『演義』唯一の女將。

(10) 藤甲軍。烏戈國王兀突骨の兵は、刀槍を通さぬ藤甲で武装する(b⑦)。

このうち(3)(5)(6)の要素は、いずれも『平話』『演義』あるいは元雜劇など、三國故事の他の部分にも類似の例が見出される。(3)の祭風は《赤壁祭風》の故事を初め、『平話』の徐庶にも見られるし、(5)の大喝は、『平話』の張飛が一喝で長坂橋を落とす、あるいは『演義』の孫策が敵將を一喝で落馬させる場面に通じる。(6)の彈琴については、雜

劇の修辭に降雪などの魔術的な作用が見えるほか、『演義』にも雪中で彈琴する場面がある。

しかし、これらは物語中、諸葛亮の用いる對抗手段として登場するに過ぎず、その他の要素は、少なくとも『平話』『演義』においては、他に類例を見ない。南征の故事が、三國故事全體の中で異質であるとすれば、その原因は、これらの要素が代表する、故事の舞臺そのものに求められるのではなからうか。

華々しい呪術を驅使し、孟獲を手玉に取る物語中の形象とは異なり、筆記小説における諸葛亮は、しばしば先進文化の教導者すなわち文化英雄としての側面を見せる。

古くは晉・常璩『華陽國志』に、「其俗徵巫鬼、好詛盟：諸葛亮乃爲夷作圖譜：以賜夷。夷甚重之」とあり、また清・田雯『黔書』に、「俗傳武侯征銅仁蠻不下、時蠻兒女患痘、多有殤者、求之武侯、侯教織此錦爲臥具、立活」といふ。雲南・貴州の現代民話にも、諸葛亮が耕作や紡織、建築などの技術をもたらしたという話が多い。

宋・高承『事物紀原』では、饅頭の起源を諸葛亮に假託して、「稗官小説云、諸葛武侯征孟獲、人曰、蠻地多邪術、須禱

於神、假陰兵一以助之。然蠻俗必殺人、以其首祭之、神即饗之、爲出兵也」といふ。『演義』や、楊潮觀の雜劇『諸葛亮秋夜祭瀘江』では、戦後の鎮魂慰靈に用いられる饅頭は、この段階では戦勝祈願の供物であった。また、彝族の現代民話には、孟獲が諸葛亮を虜にする、『七擒諸葛』ともいふべき故事があり、西南夷との関係において、諸葛亮の形象が、完全に友好的、ないし優勢ではなかったことが窺える。

二 明清地方志の南征故事遺跡

明清兩代の總志として代表的なものは、

天順五年（一四六二）刊『大明一統志』九十卷

乾隆二十九年（一七六四）勅撰『大清一統志』五百卷

の二種だが、ここに見られる南征故事關連の遺跡數は、次の通りである。

		四川	雲南	貴州
明一統志	19	10	2	
清一統志	10	64	24	

このうち『大清一統志』についてやや詳しく見てみると、諸葛亮關連のものが七十八箇所最多だが、次に多いのは關索

【四川省】

萬曆四十七年（一六一九）序刊『四川總志』二十七卷〔a〕

康熙十二年（一六七三）序刊『四川總志』三十六卷〔b〕

乾隆元年（一七三六）刊『四川通志』四十七卷〔c〕

【雲南省】

正德（一五〇六一—一五〇六）『雲南志』十四卷〔d〕

康熙三十年（一六九二）序刊『雲南通志』三十卷〔e〕

雍正十三年（一七三五）序刊『雲南通志』三十卷〔f〕

【貴州省】

嘉靖三十四年（一五五五）序刊『貴州通志』十二卷〔g〕

萬曆二十五年（一五九七）刻『貴州通志』二十四卷〔h〕

康熙三十六年（一六九七）序刊『貴州通志』三十七卷〔i〕

乾隆六年（一七四一）序刊『貴州通志』四十六卷〔j〕²¹⁾

《立廟》

〔蔡山〕：舊傳蜀漢相諸葛亮於此夢見周公，故又名周公山，因立文憲王廟（明・雅州）

〔寶藏山〕：武侯南征至此，迷路，一老嫗呼犬從絕徑中出，始得路，因建廟于上，今俗名娘娘叫狗山（e・永平縣）

〔畫卦臺〕：草萊中得石刻伏羲像，因作臺祀之（f・大理府）

周公山と周公祠については、南宋の『輿地紀勝』に既に記

載がある²²⁾。これらは『演義』において、馬援廟に祈って神助を得る故事（一—b⑤）の祖型または變形であろう。

《誓盟》

〔撥旗山〕：昔諸葛亮樹旗於此，以誓蠻人，因名（明・瀘州）

〔石堡山〕：相傳昔諸葛武侯征蠻，與酋會議盟誓之所。蠻謂會議曰分秦，又名分秦山（d・曲靖府）

〔蠻盟臺〕（f、雲南府）「會盟處」（e・尋甸州）

誓盟の内容と思われるものに關しては、『新唐書』南詔傳に「廣德初，鳳迦異築柘東城，諸葛亮石刻故在，文曰，碑即仆，蠻爲漢奴。夷畏誓，常以石搯搯」²³⁾とある。

《銅鼓》

〔祭鑼洞〕：相傳武侯所造，迄今奉爲神物（f・永昌府）

〔寶峯山〕：又名播鼓山，相傳武侯駐兵，擊鼓其上（同）

〔銅鼓山〕：山半崆峒，常有聲如銅鼓，相傳爲諸葛公所藏者

（g・貴州布政司）

〔銅鼓山〕：相傳蜀漢諸葛亮征南，於此獲銅鼓：山有洞，洞藏武侯盔甲（g・威清衛）

西南地方，ことに貴州では、しばしば銅鼓が出土したらしく、「銅鼓」の名を冠した地名が少なくない。銅鼓の出土は、後に諸葛亮の南征に假託され、さらには、

「銅鼓者、諸葛製以鎮蠻、往往埋置山谷間、有云鼓去則蠻運終」
 （c・卷二十二兵制中・諸葛銅鼓紀事）というように、呪具の一
 種と見なされた。

《祭祀・呪術》

「祭風臺：相傳武侯於此祭風、又呼爲孔明山」（f・普洱府）

「觀星石：相傳武侯觀星於此」（c・瀘州）

「觀星臺：傳聞諸葛于此觀星」（g・普定衛）

「七星營：相傳武侯於此祭七星」（h・畢節衛）

「諸葛武侯於此禱牙」「武侯祭星壇」（i・威寧府）

「觀風臺：相傳諸葛武侯於此觀星」（i・安順府）

『平話』において、諸葛亮や龐統ら軍師の行う呪術であった
 祭風・祭星が、遺跡として記録されている。ただし七星營に
 關する記載に「禱牙」とあることから見て、實際の祭星は、戰
 勝祈願の軍事儀禮であったようだ。

「獨立山：又名諸葛山：相傳諸葛亮過此、見山左右若龍虎拱向、

遂斷其脉」（d・楚雄府）「鑿山岡左右以壓勝」（清・楚雄府）

「九隆山：諸葛亮南征時、鑿斷山脉、以泄其氣」（d・金齒軍民
 指揮使司）

「保山斷脈：卽太保山接脈處、昔武侯過此、掘地以鐵物間之」
 （e・永昌府）

『江表傳』に、張紘が孫權に秣陵遷都を薦めた際の言葉とし
 て、「昔秦始皇東巡會稽經此縣、望氣者云金陵地形有王者都邑
 之氣、故掘斷連岡、改名秣陵」とあり、地脈を斷つことが、住
 民の「氣」を損ずる呪術的行爲であったことが窺える。ここ
 では銅鼓の埋設と同様、現地人の叛意を殺ぐための豫防措置
 と考えられる。

《武器・馬・水》

「藏甲洞：相傳武侯藏甲於此」（b・敘州府）

「鎮兵石：俗傳諸葛亮置此以禳兵戈」（d・騰衝軍民指揮使司）

「祭鋒臺：武侯征南時、祭劔於此」（f・永北府）

「營盤：世傳諸葛南征、曾此駐兵：有試劔石尙存」（g・平土霸衛）

「鎗擊井：傳云、諸葛駐兵于此、以鎗擊之、其泉湧出、因名」
 （h・普定衛）

「十丈空：相傳武侯南征過此、投三戟於上」（c・敘州府）

「大川原：旁有山曰孔明寄箭處」（f・普洱府）

「白饅石：武侯南征、軍人遇除夕思鄉、武侯指泉爲酒、化石爲

饅、以給軍士」（e・姚州）

「馬跑井：昔人傳諸葛武侯南征、經此土馬渴甚、泉忽開云」

「魯郎山：山旁有洗馬潭、相傳諸葛武侯南征時、洗馬於此」（i・

貴陽府)

諸葛亮と刀劍の關連は、梁・陶弘景『古今刀劍錄』にも、「諸葛亮定黔中、從青石祠而過、拔刀刺山沒刃、不拔而去、行者莫測」⁽²⁶⁾という。ただし鎗鑿井・馬跑井・洗馬潭については、關索の遺跡にも同様のものがあり、⁽²⁷⁾兩者の故事が混同している可能性がある。

《その他》

「諸葛洞：相傳諸葛武侯南征時、斬蠻帥首藏於此」(↓古州同知)
 「諸葛洞：相傳武侯征九溪蠻、嘗過此、留宿洞中、設一床・懸粟一握、以秣馬、後遂化爲石床石粟、至今尙存」(明・平茶洞長官司)

「漢諸葛屯營：地名馬場山、遺錫一口于山中、半入土內、人不能取」(h・平越衛)

「糧堆所：武侯覆糧於上、以示彝人」(e・永昌府)

「打牛坪：武侯南征、值立春日、鞭土牛於此」(e・永昌府)

「馬謖溪：武侯征南蠻、謖獻輿地圖、屯兵溪上、因名」(c・瀘州)

「藏甲巖：俗名鬼王洞。漢王志英武過人而貌陋、軍中呼爲鬼頭。官至校尉、從武侯征南、擒雍閩、過此藏盔甲、以鎮服百蠻」

(h・貴陽府)

王志はおそらく王士の訛傳であらう。『蜀書』によれば、王

士は廣漢郡の人、劉備に從つて入蜀し、犍爲太守を務めた後、南征に際して益州太守に轉任したが、赴任前に南夷に殺害されたという。⁽²⁸⁾鬼頭王志の名は、閬州の守將として『花關索傳』に登場し、花關索と戰つて敗れ、その部下となる。ただし『花關索傳』には、王志が南征に從つたことは見えず、逆に藏甲巖についての各地志の記述には、關索との關連は語られない。

《演義》起源？》

「諸葛營：昔武侯南征、每兵斗土築城、屯軍於此」(f・曲靖府)

「聖泉：孔明南征、軍士飲啞泉水不能言、孟節指此水、飲之得甦」(b・四川行都司)

「諸葛寨：武侯擒孟獲於銀坑洞、卽此」(f・鄧川州)「豪豬洞」

(清・大理府)

蜀軍が毒泉に苦しみ、馬援の加護によつて孟獲の兄・孟節の助けを得ることは、『演義』でも語られる(一・b⑤)。同様に、『演義』で孟獲の弟とされる孟優については、『清一統志』にその墓の所在が記される。⁽²⁹⁾孟獲の本據地を銀坑洞とする。こゝとも『演義』に見え、これらは『演義』以後に附會された遺跡である可能性がある。ただし啞泉に關しては、貴州にも「關嶺：對山有一泉、相傳飲之令人啞、因立石以戒行者」(i・安順府)

と同様の遺跡があり、また

「三臺相井：舊志謂、武侯平蠻、軍至此、苦無水、見一老嫗指地、得泉」（f・順寧府）

というのは、この故事の變形か、あるいは祖型であるかもしれない。

結 問題點と展望

以上の資料から鑑みて、明清地方志に見える南征故事の特徴としては、次の諸點が挙げられる。

(一)「鎮蠻」故事の存在。民話傳承に見られる友好的な文化英雄像とは異なり、銅鼓の埋設や地脈の斷絶など、呪術的な鎮壓を行う征服者の側面を見せる。

(二)『演義』南征故事との關連。毒泉、水の缺乏、神助による苦境の打開は、いずれも『演義』の(b⑤)と共通する。南征の苦難については、宋の『太平實字記』嶺州の項にも、「大家：武侯軍過、士卒遭瘟疫、以大家葬之在縣南」³¹⁾とあり、『演義』のこの情節には、實は南征故事の古い形が保存されているとも考えられる。

この假説の今一つの傍證となり得るのが、『演義』において神助を授けるのが、伏波將軍馬援とされることである。馬援

は交趾平定の事蹟により、實際に雲南・貴州の各地で廟祀されていた。萬曆『貴州通志』および嘉靖『思南府志』には、關羽が交趾遠征の際に築いたという「關羽城」なる遺跡が思南府に見え、康熙『雲南通志』には、雲南府に龐統を祀る白馬廟があったとする。乾隆『貴州通志』には、白馬廟は馬援廟の名稱として見え、³²⁾これらは本來、馬援に假託された遺跡であったと思われる。

(三)神話的英雄としての諸葛亮。從來、三國故事の總體において、劉備や張飛が英雄故事の主人公であるのに對し、諸葛亮は智者の役割を果たすと見なされてきたが、南征故事の遺跡においては、諸葛亮もまた、武器や馬など英雄の持物と關連づけて語られる。これを見る限り、南征故事における諸葛亮は、關羽や關索と同様の神話的英雄であった可能性があるが、王志に關する記述の混亂から窺えるように、諸葛亮と關索の故事が混同されているとも考えられ、豫斷は許されない。

現存の文獻において、三國故事が大きな發展を遂げたのは元代であるが、元代はまた、雲南が中國の版圖に復し、銀の採掘など大規模な開發が行われた時期でもあった。南征故事においても、地名に見える元代の呼稱、³³⁾また孟獲の本據地を

「銀坑洞」と稱するなど、元代の歴史的事情が反映されている可能性があり、今後の研究には、加えてこの方面からの比較検討が必要となろう。

注

- (1) 乾隆『四川通志』卷二十四山川(『文淵閣四庫全書』史部・地理類)、『花關索傳』別集4b。
- (2) 豫劇・秦腔・川劇などにも同様の劇目があるという。『京劇劇目辭典』(中國戲劇出版社、89年6月北京)二九七頁。
- (3) 嘉靖本1—3、毛本第2回。
- (4) 南征については『蜀書』第三後主傳、第五諸葛亮傳、第十三馬忠・李恢・呂凱傳、および『華陽國志』卷四南中志を参照。
- (5) 『蜀書』諸葛亮傳注引『漢晉春秋』、第九馬謖傳注引『襄陽記』、『華陽國志』卷四南中志では「七虜七赦」とする。(劉琳『華陽國志校注』巴蜀書社、84年7月成都)
- (6) 『後漢書』卷八十六南蠻傳注。
- (7) 嘉靖本18—9、毛本第90回。
- (8) 「武侯急下馬、披頭跣足、持劍祭風」(平話、卷下)「頃刻之間、狂風大作、猛獸突出。孔明將羽扇一搖、其風便回彼陣中去了」(嘉靖本18—9。毛本第90回は「本」を「彼」に作る)なお、軍師の祭風については拙稿「龍統と諸葛亮」(『中國文學研究』二一、95年12月)を参照。
- (9) 「軍師出、喝三聲、南陣上蠻王下馬」(卷下)
- (10) 「叫聲如雷灌耳、橋梁皆斷」(卷中)
- (11) 嘉靖本3—10、毛本第15回到相當箇所。
- (12) 嘉靖本19—7、毛本第94回到相當箇所。
- (13) 『華陽國志』卷四南中志。
- (14) 田雯『黔書』下卷・武侯錦(貴州人民出版社、92年3月貴陽)
- (15) 湖北省群眾藝術館(編)『三國外傳』上海文藝出版社(86年8月上海)、王一奇・他(編)『三國人物別傳』中國戲劇出版社(90年11月北京)、鍾敬文(編)『三國演義』的傳説』南海出版公司(90年8月海南、92年3月2刷)など。
- (16) 高承『事物紀原』卷九酒醴飲食部・饅頭(『叢書集成初編』商務印書館、一九三七年六月上海)。
- (17) 『吟風閣雜劇』三二(上海古籍出版社、83年9月上海)
- (18) 《孟獲的故事—跟諸葛亮打仗》『三國外傳』(前掲)二三四頁。
- (19) なお、麗江から大理にかけての南征遺跡、および貴州の關索遺跡については、「實際には元代における軍事事情、特にウリヤンハタイ、アジュ父子の活躍を投影しているのではないか」という指摘がある。『花關索傳の研究』(汲古書院、89年1月)六一—七〇頁。
- (20) ただし、同時期の地方志には、赤壁祭風臺の記載が見られる(乾隆五十五年重修『嘉魚縣志』卷一封域、古佚小説會[R]91年4月、香港)ように、『一統志』に記載されないことは、必ずしも遺跡自體の存在を否定しない。
- (21) 「[a][b][e][f][j] 國立國會圖書館藏本
[c][i] 『景印文淵閣四庫全書』臺灣商務印書館(R)86年

3月臺北

「d」「g」『天一閣藏明代方志選刊續編』上海書店（R）

「h」『日本藏中國罕見地方志叢刊』書目文獻出版社（R） 91年11月北京

(22) 王象之『輿地紀勝』卷一四七雅州。江蘇廣陵古籍刻印社（R） 91年11月揚州

(23) 卷二二上・南蠻（上）。

(24) なお今日では、諸葛銅鼓は諸葛亮が南征時に創案した軍器と解釋されている。成都武侯祠博物館（編）『武侯祠大觀』（四川人民出版社、88年4月成都）二一七頁。

(25) 『吳書』第八張紘傳注引。

(26) 『太平御覽』卷三百四十、兵部七七。中華書局（R） 60年2月北京（92年2月4刷） 陳翔華は『諸葛亮形象史研究』においてこの一文を引き、「這種“拔刀刺山”的舉動、確實是人所不解而且也是無人可解的」と評する。（浙江古籍出版社、90年12月杭州、六二頁）

(27) 馬跑泉（g・安莊衛、永寧州）、飲馬池（j・南籠府）、插鎗崖（h・烏撒衛）、石槽關（相傳爲關索飼馬處。j・思南府）など。

(28) 王士の略歴は、『蜀書』第十五楊戲傳引『季漢輔臣贊』原注。『花關索傳』の登場人物では、南征との關連はないが、その師・花岳先生が關索に兵書を授けたという山が綿州にある（c・太平縣）。また、現・廣元市には關索の妻鮑三娘の墓、貴州の安順府永寧州には鮑三娘山がある。『三國演義辭典』（巴蜀書社、

89年6月成都）四六七頁および成豐『安順府志』卷九『花關索傳の研究』二二七頁。

(29) 『華陽國志』南中志には、「亮提：朱提孟琰及獲爲官屬：琰、輔國將軍、獲、御史中丞」とある。

(30) この他、曲靖府諸葛營の「斗土築城」は、「演義」（b⑥）の三江城攻略に類似の情節が見える。嘉靖本18—9、毛本第90回。

(31) 『太平寰宇記』卷八〇。（文淵閣四庫全書本）

(32) 卷十六思南府、および嘉靖十六年（一五三七）刊『思南府志』卷之一・古蹟（『天一閣藏明代方志選刊』六七 上海古籍出版社（R） 82年12月重印）。なお乾隆『貴州通志』では、「關索城」と稱され、關索の遺跡とされる。卷七地理・古蹟。

(33) 卷十八祀典・雲南府、卷十營建・壇廟・平越府。

(34) 『三國演義辭典』（前掲）三六二頁。